黄巾と共に我は無双する

隙間風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黄巾と共に我は無双する

【Ｎコード】
Ｎ４５９０Ｚ

【作者名】
隙間風

【あらすじ】
かつて大陸を群雄割拠へと導いた存在。黄巾党。その存在がまだ大陸にばっこしていた時から始まる物語。

※この作品は作者の力不足故の駄文によって構成されています。なお真・恋姫†無双はキャラ設定のみとなります。
「それでもかまわないよ」と言う方は読んでいただけるとありがたいです。

感想・アドバイス等ありましたら作者の成長のためと思いしていただけると嬉しいです。

無力

俺は生きているが死んでいる。

この世に生を受けながらにして世のためになにもしていない。

これが俺の死だ。

大陸では黄巾党っていうのがばっこしているらしいが無力の俺にはどうすることも出来ない。

「はあ～・・・・・・・・」

そんなこんなで俺は農作をしながら物思いにふけっている。こんなこと考えていても何も変わりゃしないなんてことは前から分かっている。だけど考えずにはいられない。

その理由としてはひとつ。古くからの学友でもあり良き友でもあった楊奉が黄巾党に入ったという噂を最近耳にしたからだ。

「なんであいつ黄巾党なんかに・・・・・・・」

俺の中では黄巾党というのはただの殺戮集団または略奪集団という認識だ。まあ俺が聞くかぎりではその通りなわけだが。

空を見上げると雲行きが怪しくなっていた。

「・・・・・・・・・降りそうだな」

俺は急いでほこらに向かう。

俺の住んでいる村ではこの村だけの神様信仰があった。ちなみにその神様は主に自然全般を担当しているらしい。だからこうやって今の時期のように雨が多く降ったり日照りが続くような時にはお参りにいくのだ。

そして少し歩いてほこらに着いた俺はよくある参拝姿で丸い石が二つ重ねてあるだけの神様にお願いをする。

雨が止みますように・・・・・・・・・・・・・・。

「！」

なんだ！？ほこらに後光が！？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「どこだここは・・・・・・・・・・・・？」

地に足をつけている感覚がない。なんと表現すればいいんだろう？そうだな、浮いているとでも言うのだろうか。そんな自分の姿を想像は出来ないが。

「君だね。わたしにお願いをしたのは」

その声の主とともにまわりが明るくなる。しばらく目が慣れなかったがだいぶ見えてくると目の前には髭か濃く体格もがっちりとした男がいた。

「誰だ？俺にはあなたみたいな知り合いはいないんですけど」

「そうだな。わたしはさしずめ君の世で言う神様という奴だ」

あまりにも胡散臭かったが俺は冷静に問いをぶつけた。

「神様だっていう根拠は？」

とはいうもののこんな場所にいる時点で疑う余地は俺には考えつかなかった。が、とても信じられるようなことではないので一応聞いておく。

するとその自称神様は自らの立派な髭を触りながら俺の問いに答えた。

「その答えは君がすでに分かっているはずだ。そんなことより君は自分の無力さを嘆いているのだろう？だから私は君に力を与えようと思いここに君を呼んだのだよ」

「・・・・・・・・・力？」

「そうとも。私も立場上、下界の今の状況はなにかと厄介でね。なんとかしようと思っていたのだが私が干渉することは出来ないのだよ。だから君に力を与えてなんとかしてもらいたいのだ」

・・・・・・・・・つまり俺を利用しようというわけか。

だが俺はこの状況とこの自称神様の言うことに心が惹かれた。初めて生きている心地がした。

「・・・・・・・・・具体的には？」

口角をあげ、にやりと笑った自称神様は言った。

「君には人並み以上の武と・・・・・・・・・・そうだな、人の考えを読み取る力を与えよう。しかしこの力に至っては人智を超えた力故少しばかり制限をつけさせてもらうがな」

「制限というと？」

「なに簡単なことだよ。単純に考えを読み取れるだけで、人の気持ち、心は読み取れない。そういった制限だ。この制限がなければ君も人ならざる神になってしまうからね」

まさかそのような力を本当に手に入れることができるのか？いやそれは間違いないだろう。直感が俺にそう告げる。

それよりこの力を授かってもいいのだろうか？そんなことが許されるのだろうか？

色々思案した俺であったが結局答えはひとつしか無かった。

「その力を俺にくれ」

この返事を分かっていたかのように自称神様は言う。

「そう言うと思っていたよ。だがひとつだけ我らで誓いをたてなければならない」

「？」

「ひとつ、この事は絶対に口外しない。ふたつ、この力はこの世のために役立てること。この誓いを破ったあかつきには・・・・・・・覚悟しておけよ。・・・・・・・ただしこの誓いさえ守ってさえくれればあとは君の好きなようにしたまえ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

少し沈黙を保ち俺が小さく頷くと辺りがまた暗くなった。
それと同時に俺にただならぬ頭痛がはしる。

「くっ！」

そのまま俺の意識は薄れていった・・・・・・・・・

「・・き・・・・・」

なんだ？まだ頭がはっきりしていない。痛みは少しやわらいではいるが。

「・・・き・・・・・ろ・・・・」

ん？誰の声だ。

「起きろおおおおおおお」

「うわっ！」

急いで起きるとそこにはよく知る顔があった。まあ俺の親なわけだが。

どうした？と俺が尋ねると母親はただならぬ様子で俺の肩に両手を置きながら諭すように言った。

「落ち着いて聞くんだよ。あんたは寝てたからきずかなかっただろうけど今あたしたちの村は襲われているんだ。このままじゃもうもたない。悲しいかもしれないけどこの村は捨てて早く逃げるんだよ」

正直まだ頭がおっつかないためあまり理解できていなかったがこの言葉だけは頭に響いた。

村を捨てる。その言葉が俺に重くのしかかった。今までの俺ならそうしただろう。だが今の俺には救いたいという気持ちしかない。決してさっき力を授かったからというわけではない。なぜかは分からないがそう思ってしまったのだ。

「・・・・・・・・ごめん」

俺は母親の腹部を思いっきり殴った。すると声にはならなかったがなにか言いたげなまま母さんは倒れていく。

「・・・・・・・・・死なないよ・・・・・・・・」

―死なないで―

母さんのそんな考えが俺には分かった。おそらくこれが神の言う力なのだろう。

これがさっきの出来事を確信へと変える。

その後母親を安全な場所に隠し俺はほこらに背を向け走り出した。

離郷

俺が村に戻るとそこは戦場と化していた。
いやこれはもはや戦場とは言えないかもしれない。略奪、惨殺そんな光景だけが俺の目に映ったからだ。
そしてその標的は俺へと向けられる。
「うおりゃあああああ・・・・・・」
その狂気じみた声とともに俺へと一人の賊らしき男が走ってくる。
よく見るとその男の腕には黄色のひたたれが巻いてあった。ということはおそらくこの集団は黄巾党で間違いないだろう。
そんな事考えているうちに俺と賊の距離はどんどん縮まっていく。
そして俺の目の前に賊が迫った。
―殺す―
俺の頭にその二文字が浮かぶ。
今こいつはこう考えているのだろう。
そして賊は俺に斬りかかってくる。
だが俺は次々とその斬撃を避けていく。

「なぜだ？」

そんな表情を浮かべながらそんなことを呟く賊は焦っているように思える。

神の力による考えを読む力で俺には相手の考えが手に取るようにわかる。これはすなわち敵の動きを読めるのと同義だ。それに加えて今の俺の身体能力。これなら避けるなどたやすかった。

すると疲れ始めた賊に隙が生まれた。

俺は拳を握り締め賊の顔面を殴りつけた。

「ぐはあっ！」

そのまま殴られた勢いとともに賊は後ろに倒れた。どうやら今の一発で完全に気を失ったようだ。

俺は左手で賊の腰から差してあった剣を抜き取り右手に持ちかえる。

「いくか・・・・・・・」

俺は村の中枢へと走っていった・・・・・・・・。

今俺の周りには確認できるかぎり１５人の賊がいる。その１５人に俺は囲まれているのだ。

それを次々と斬りつけていく。

「ぎゃあああああああああああ・・・・・・・・・・」

俺の体が血で赤く染まっていく。

―殺してやる―

―こいつ八つ裂きにしねえと気がすまねえ―

こいつらの考えが俺の頭に流れ込んでくる。

「・・・・・・お前らは何のために生きている？」

俺は構えをとき静かな怒りを込め賊たちに疑問をぶつけた。

「はあ！？そんなもん決まってんだろ。金を手に入れ女をはべらせ

るためだよ！」

ふっ。俺はその答えを鼻で笑った。

そんな下賤な答え俺は求めたのではない。まあこんな奴らから正しい答えなど見出せるはずなどないと分かってはいたが。

そして俺は再び剣を構え直し賊の心臓へと剣を貫く。

「こいつ！」

賊は俺を睨みつけ今にも襲い掛かってきそうな様子だ。にもかかわらず襲い掛かってこないのは俺を警戒してのことだろう。

俺はすぐにでもこいつらを殺そうとした。

だが・・・・・・・・・

「ぎゃあああああああああああ・・・・・・・・・・」

俺の背中越しにそんな悲鳴が聞こえてきた。

俺は構えたまま後ろを振り向く。

するとさっきまで敵対していた賊たちが次々と見知らぬ集団に斬ら

れていた。その集団は皆白い装束を身に纏っている。

しばらく傍観していると周りの賊はあらかた地に倒れていった。

するとその集団からひとり俺の前に歩み寄ってきた。

「いらぬ助けと思ったけど一応そういう性分なんで助けさせてもらったぞ」

その男は身長は俺より高くすらっとした印象を覚える。肌はけっこう色黒だ。

俺はその男の言葉に偽りがないか一応確かめておく。

そして俺が男に神経を集中させたと同時にこの男の考えが頭に流れ込んでくる。

・・・・・・・・・一応本当のようだな。

どうやら本気でこいつは俺一人の命を救おうとしたようだ。

「ありがとう」

真意が分かった俺は男にそう告げた。

「いやいや気にしなくていいよ」

軽く微笑みながらそうきりかえしてきた男は身を翻しこの場を立ち去ろうとした。

「待て！」

だが俺はそいつを引き止める。
その呼びかけに男は振り返ってこちらを見る。

「名を教えてくれ」

少し不思議そうに考えていた男であったが親指で自分を指をさしながらこう言った。

「僕は韓選（かんせん）だ。白波谷で白波賊をやっている。賊と言っても略奪とかはやってないけどね」

白波賊・・・・・・・・。聞いたことないな。だがどうやらこいつが言うように略奪などは一切やっていないらしい。ちなみにこれもこの韓選の考えを読み取ってのことだ。

俺は頭の中で考えをまとめた。

神に言われたとおり俺は今こそこの力で大陸を救うつもりだ。しかしそれにはまだあまりにも人という名の力が足りない。
だがそれがなんとかなるかもしれない方法が俺は思いついた。

「じゃあ僕はこれで・・・・・・・」

「俺も連れてってくれ」

「えっ？」

韓選は驚いた様子で言った。

「俺も白波賊に入れてくれ。もちろん他意はない」

韓選は額に手をあて考える素振りを見せる。まあ韓選からしてみれば見知らぬ奴がいきなり仲間に入れろと言っているので疑うのも無理はないだろう。

だが俺には分かっている。こいつが俺の武を欲していることを。ならば答えはひとつしかない。

「・・・・・・僕たちの首領に聞いてみないと分からないけど君の武は魅力的だからね。連れて行くだけは連れて行けるよ」

やはりな。しかし・・・・・・すでに分かっていることを改めて言われることは存外こくなものだ。

俺は韓選に一礼すると母親の存在を思い出しこう言った。

「母親をまたしてるので少し待っていてもらってもいいか」

了承してくれた韓選に再び頭を下げると俺は急いで母親を隠してあるほこらへと向かった。

「母さん！母さん！」

「ん～・・・・・」

俺が体を揺すりながら呼んでいると母さんは目を覚ました。

「どうしたんだい？」

俺は慎重に言葉を選んだ。少しでも母さんを悲しませないために。

「俺・・・・・この村を出て行くよ・・・・・」

何かを察してくれたのだろう。母さんは俺にこう言ってくれた。

「あんたの好きにおし・・・・・」

そう言ってはくれたが母さんは目に涙を溜めていた。
そんな母さんを見て俺は一瞬神から授かったこの力が馬鹿らしくなった。母さんはなにも言わないでも俺の考えなどお見通しだったからだ。
俺は黙って背を向ける。

―死なないでね―

「死なないよ。いつか迎えにいく」

俺は小さく呟くと全力で韓選のもとへと走った・・・・・・・・・

再会

「ここだよ」

俺は韓選の案内により白波賊の拠点となっている場所の前にいる。見る限りでは使わなくなった屋敷のようだ。大きさはなかなかのものでけっこうな富豪が住んでいたのではないかと勝手な想像が膨らむ。

「じゃあ入ろうか？あ・・・・・でも一応僕の部下に見張らせておくから・・・・・。べっ別に疑っているってわけじゃないんだよ」

「・・・・・大丈夫だ」

俺は目を閉じる。

すると韓選や周りの兵士の考えてることが分かってくる。

やはりこの人たちは少なからず・・・・・というかおおいに俺を疑っている。まあそのぐらいは仕方の無いことか・・・・・。

韓選を先頭に兵士に囲まれるかたちで俺は首領とやらのいる部屋まで廊下を進んで行く。

「どうぞ」

俺は部屋に入り辺りを見回す。右の壁には武器が立て掛けてあり左の壁には何人かの兵士が立っていた。

そして正面には俺に背を向けた男が一人立っている。見た感じだとこの人がこの白波賊を仕切っている首領のように思える。

「辰さま先ほど早馬にて伝えた者がこの男です。この者の武は報告した通りであります」

韓選はそう言った。この話し口調からしてやはりこの俺に背を向けている男が首領とやらしい。

「そうか」

男はゆっくりこちらを向く。

顔にはいくつもの傷跡が有り髪が肩までである。がたいが良く俺と身長がさほど変わらないというのに俺よりも一回り大きく見えた。

「お前が賢からの報告であった武がたつ男か」

そう言うと俺の目の前に何も臆せず歩み寄ってくる。まあこの状況では何かしたところで俺が真っ先に捕まるのは目に見えてはいるが。

そして辰と呼ばれた男は俺を品定めするように足の先から頭のてっぺんまで舐めるまわすように見る。

ーとても武に秀でているとは思えねえなー

「すいませんね。そういう風に見えなくて」

俺はついこの男の思考に返事をしてしまった。まずい！と思ったときにはすでに遅かった。

「どうしたんですか？」

韓選は俺にそう言う。

なんとか言い訳をする言葉を頭の隅からひっぱりだしてくる。

「いや・・・・・・・ええと・・・・・・」

俺はこのときさぞや挙動不審であっただろう。だが仮に俺じゃなくてもこの場面で言い訳など思いつくはずが無い。

そのとき思いもよらぬところから助け舟がでる。

「そんなこたあどうでもいいんだよ！」

「辰さま？」

辰と名乗る男が俺に集まっていた視線を自らに引き寄せる。

「そんなことよりお前！俺とさしで勝負しろや」

・・・・・・・突拍子もない事を言うなあ。

俺は内心少し驚いていたが周りの者はあまりそういう風には感じられなかった。むしろ「またか」みたいな感じで見ている。

「ええ。まあいいですよ」

「そうか！じゃあさっさと表に出ろ！」

そして俺は流されるままに屋敷を出て広い庭のようなところへやって来た。外は雨だというのに男は全く気にする様子がない。

「お前はこれを使え！」

そう言うと俺に一本の剣が渡される。模造の剣ではなく真剣だ。

そして俺の目の前には既に武器を構えている首領の姿がある。それにしても・・・・・・なんだろう？剣ではない。なぜなら片方にしか刃がついていないからだ。俺も世間のことはよく知らないがこんなものが大陸にある話は聞いたことが無い。しかも異様に長い。刃だけでも俺の身長くらいあるのではないだろうか？

そんなことを考えていたがそろそろ痺れをきらしたらしい。

「さっさと始めるか！」

そう言い放つと両手で握ったその異様な武器を高く振りかざし真っ直ぐにこちらに突っ込んでくる。

俺は振り下ろされた武器を最小限の動きで避ける。

「ほう・・・」

感心しているようだな。俺をなかなか腕がたつと認めたらしい。だが俺はそんなものを求めていない。俺が求めているのはこの人への絶対的勝利だ。

そして大振りになると読んだ俺は身を屈ませそれを避ける。ただでさえ長い得物なので振り終えた後体勢を整えるのが遅くなる。

・・・・今だ。

俺はそのまま隙の生じたところに突きをくらわそうとした。俺にはこの人が次にすることが分かっている。この人は避けるために地面を蹴りつけ後ろに下がるつもりだ。だから俺はあえてそのまま突きの体勢で突っ込む。

そんな未来予想図が俺のなかで出来上がっていた。

だがそんな俺の考えは裏切られる。

たしかにそうこの人は考えていた。だから俺は自らが考えたように突きをくらわそうとした。だが現実は違った。この人は避けるのではなく振り切った得物の勢いを殺さないまま自らの右足で俺の体を蹴ってきたのだ。

「ぐはあっ！」

そのまま俺は右に吹っ飛ばされる。

俺はすぐに立ち上がり次々とくる攻撃を防いでいく。

なぜだ？なぜ俺はこの人の考えが読み取れなかったんだ？いや。たしかに考えは読み取れていた。だがそれが途中でいきなり変わったのだ。

そんなことを考えていた俺に一つの仮説がたつ。

・・・・・・・もしや・・・・本能で戦っているのか？

実際戦っていると分かる。この人はかなりの武の持ち主だ。おそらく相当の鍛錬を積んだのだろう。それ故に自らの体に染み付いた動きと勘で戦っているのではないか？

これなら納得がいった。

だがそうなるとこの神の力など全く役に立たなくなってしまう。むしろ勝手な先入観が出来てしまうため邪魔でしょうがない。

「おいおい！おいおい！お前の力はそんなもんかあああ！」

そんな俺にようしゃない斬撃が浴びせられていく。

正直この考えが読み取れる力が無くなった俺はこの人に武だけでは劣っているように思える。

だが・・・・・・・負けられない。

そして俺は強い睨みを浴びせる。俺の志を込めた眼で。

「・・・・・・良い眼してんじゃねえか。お前」

そう言った男は構えをとき俺に手を差し伸べる。

「ようこそ。白波賊へ」

俺は顔には出さなかったがけっこう驚いた。なぜ俺をいきなりそんな風に認めたかは分からない。いやこの人の頭の中を覗けばすぐにわかることだ。
だが俺はあえてそれはしなかった。

そして俺もその手をがっちりと握り締める。

「お世話になる」

そして俺も剣を地面へと突き刺す。

するとそれまでずっと俺たちの戦いを見ていた韓選は拍手をしながらこちらに走ってくる。

「いいもの見せてもらってよ！二人とも！」

そんな韓選を見た首領は薄い笑みを浮かべた。すると俺へと向き直り言った。

「そういやあ、まだ名乗ってなかったな。俺は楊奉だ。ふっ今日は気分が良い。俺の真名、辰っていうのもお前に預けてやるよ」

「そうか。じゃあ俺も名を教え・・・・・・すまないがもう一度、名を教えてくれないか？」

「あ！？ったく、めんどくせえなあ。楊奉だ」

・・・・・・・・これはまさかのまさかっていうやつなのか？

「もしや昔、楊雷人平（ようらいじんへい）という友がいなかったか？」

「・・・・・・ああ。そういやあいたな。そんな奴も」

「・・・・・・・・その、そんな奴が俺なんだが・・・・・・」

俺は笑みを浮かべてそう言った。けっして笑顔というわけではない。

そうだなうすら笑みという表現が一番合っているかもしれない。

「・・・・・・・・・はあああああああああああ？？！！」

その叫びが雨が降りしきる中木霊した・・・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4590z/

黄巾と共に我は無双する

2011年12月17日20時56分発行